

農文協名著が電子で蘇る

先人と伝統の叡智に学び 未来への想像力と構想力を広げていこう

農文協 全集 電子書籍目録

掲載全集の各巻の詳細が必要な場合は別途内容紹介目録をお送りします。
下記の農山漁村文化協会（農文協）「お問い合わせ先」へお申し付け下さい。

配信タイトル

※価格は本体（税別）

日本農書全集	全69巻	同時1アクセス	1,229,167円
明治農書全集	全13巻	同時1アクセス	219,997円
明治大正農政経済名著集	全24巻	同時1アクセス	287,565円
昭和前期農政経済名著集	全22巻	同時1アクセス	355,146円
昭和後期農業問題論集	全24巻	同時1アクセス	297,323円
昭和農業技術発達史	全7巻	同時1アクセス	213,711円
稲学大成	全3巻	同時1アクセス	157,142円
SCIENCE OF THE RICE PLANT	全4巻	同時1アクセス	436,856円

※掲載電子書籍は底本をスキャンしたものです

●農文協の法人向け電子書籍は、
株式会社 紀伊國屋書店の「KinoDen」にて販売しております。
詳細は HP をご覧ください。



農山漁村文化協会

「お問い合わせ先」 一般社団法人 農山漁村文化協会（農文協） 電子開発部

〒107-8668 東京都港区赤坂 7-6-1 Tel:03-6277-8172 Fax:03-3589-1387

ebook@mail.ruralnet.or.jp

電子全集の詳細は <http://www.ruralnet.or.jp/digital-zensyu/>



循環型社会の原像、持続する社会への豊富な示唆 江戸期日本と庶民の仕事、暮らし、こころの記録

江戸の町方の歴史は文献や文学でよく知られているが、農村は意外に記録がない。農書はその欠落を補い、江戸期の地方に生きた庶民の暮らしの全容が把握できる一級の資料となる。



日本農書全集デジタル版は、刊行された全72巻より、第26巻「農業図絵」、第71巻「絵農書Ⅰ」、第72巻「絵農書Ⅱ」の3冊を除いたものです。

全69巻揃価格 同時1アクセス：1,229,167円(本体) 同時3アクセス：1,843,751円(本体)
発行：1977年 冊子版全72巻 ISBN:9784540993015

日本農書全集

全69巻

第一期編集委員
山田龍雄(九州大学)
飯沼二郎(京都大学)
守田志郎(名城大学)
岡光夫(同志社大学)

第二期編集委員
佐藤常雄(筑波大学)
徳永光俊(大阪経済大学)
江藤彰彦(久留米大学)
※いずれも発刊時の所属大学

●日本農書全集 電子書籍化にあたって

江戸初期の百年間は、戦乱の終息とそれにもとづく新田開発により、人口が三倍に急増する「高度成長」がありました。また、それまで輸入に頼っていた木綿や絹、砂糖、薬剤などの需要拡大と国産化、商品経済や流通手段の発達により、栽培技術の発展・普及・拡大が強く求められていた時代です。

こうした社会的・経済的要求に応え、中国の代表的な農書である『農政全書』を参考に、宮崎安貞がわが国の実情に応じて翻案した『農業全書』が版行され、広く全国に普及し、大きな力となりました。そしてそれが土台となり、さらに南北に連なり、海流や山岳など、複雑な自然・気象・風土環境の多様さや地域差に応じた、より実践的で多様な農書が、日本各地の篤農家によって編まれ、著わされて、それが口伝や筆写、版行によって広く普及し、大きな役割となつて、生産性の飛躍的な向上や多様化、広域化の展開に大きく資し、時代を切り拓き、ひいては日本の近代化の土台となったのです。

こうした先人の自然と生産、生活に関する叡智をまとめた数多の農書は、わが国の複雑で多様な自然に向き合い、それを活用し、生産の向上、確保をするうえで重要な意味をもつ書物です。また、そこには国際化や消費ニーズの多様化、激動的な時代に対応し、農業生産はもとより、家産や集落・地域を維持していくうえで、有意義な経験とヒントが満ち溢れています。

地域自然や作物と向きあい、その特性を活かしたつそを守り、より豊かに育んできた「共存・共生」の知恵と工夫の集積、大成を実現したこの『日本農書全集』は、自然と乖離した今日のわれわれにとつて、かけがえのない地に足をついた知の宝庫・集成として、さまざまな示唆と勇気を与えるツールとなるに違いないと確信し、ここに電子化したしました。広くご利用いただければ幸いです。

●本全集は一九七七年より二四年の歳月をかけ全国から三百余点の農書を発掘、郷土史家を中心に二三〇人の研究者が訳出した。地方に密着して地方のことで書かれた具体的な記述ゆえに読解は難航をきわめ、研究者は互いに自身の読解できたところをつきあわせ、全巻訳出にこぎつめた。

●農書の原文と綿密な現代語訳、詳細な注釈と問題を付け、江戸時代の農村からメッセージを今の言葉で誰でも読めるように編集されている。筆法が多くは在郷の庄屋をはじめ一般の人たちで、農法に始まり農民の解説、災害と復旧など幅広い題材が扱われている。

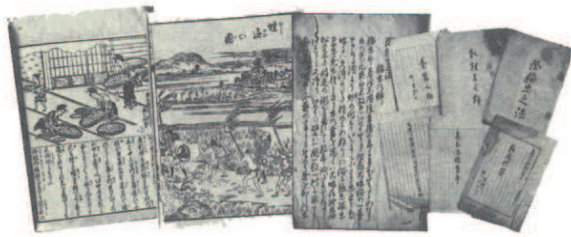
●近世農書(地域農書)の周辺には本草書、救荒書、物産書、農業・百姓往来物、土木・治水書、農民心得・家訓書、農事日誌類、農業法令書、農政書、地方書、蚕書、林業書、漁業書、畜産・獣医書、園芸書など、多様な第一次産業関係の文献やこれらの文献を引用・改変した二次農書が存在している。以上より本全集は「特産」「農産加工」「園芸」「林業」「漁業」「畜産・獣医」「農法普及」「農村振興」「開発と保全」「災害と復興」「本草・救荒」「学者の農書」「地域農書」「農事日誌」の14分野のテーマから系統的に読むこともできるように編集されている。

伝統のなかの宝石の蔵

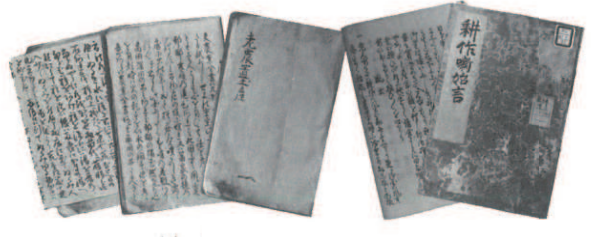
●作家 司馬遼太郎

ここ数十年、政治という概念を超えたほどに巨大な国家運営が、大胆すぎる取捨をおこなったために、農業を惨憺たる状態に変えた。「工業製品を外国に買ってもらおう。そのかわりに、外国の農業製品を買おう」という国家運営の基本構造が正しかったかどうか、後成の評価にまたなければならぬが、ともかくこの基本構造の中で、農業(農政、農業経営、さらには農業技術までふくめて)は、歪曲と変形、変質を強いられ、それが社会に対しあらゆる意味での即応を不可能にしたばかりか、生産の基本ともいえるべき二千年来のモラルまでかきまわってしまった。この凄惨な状況から農業を救いだす道はいくつかあるかもしれないが、まだ一部の賢者の意見にすぎない。もっと多数の農民・非農民が、伝統の中の知恵という宝石の蔵である古農書を検討し、そこからさまざまな何をどうととるよりも、まず検討を仕直すという姿勢をとるところから再出発する必要があるのではないか。

一九七七年記



古文書が読めなくても
原文・現代語訳で読めます。



農書を現代に活かす 14 の視点 分類テーマとその概略

地域農書

第1・11、15・41巻

村にあつて自らの農事体験をもとに書き残されたもので、その地域で栽培・飼育された作物全般にわたり、生産と生活が合体した形で記述されたものであり、総合農書と称してよく、地域固有の農法の記述であると同時に、近世庶民の暮らしについての一次資料として貴重である。

特産

第45・49巻、他

各地の商品化された特産物を扱う。(収録巻数)

- あい (30・45) 油桐
 - (47) なたね (1・45) 楮
 - (47) はぜ (13・31・33)
 - 漆 (46) 紅花 (45) さとうきび (14・34・44・69) 茶
 - (47) さつまいも (70) しいたけ (45) じゃがいも
 - (70) 蕎麦 (70) たばこ
 - (45) 朝鮮人参 (45) 梨
 - (46) みかん (46) 海苔
 - (45) 養蚕絹 (35・47) 綿
 - (15) 葉草 (68)
- 第48・49巻の能登の山村松標左衛門著『工農業事見聞録』は国産振興のために諸国を巡歴して農産物調査をした膨大な記録である。当時の全国の特産がわかる。

農産加工

第50・53巻、他

第50巻でさとうきびからの製糖法、松前の輸出海産物、製油、製葛を第51巻で酒造を第52巻で漬物、豆腐、麩、醤油、味噌、製塩を第53巻で塗物、紙漉き、績麻、生糸、樟脳、製炭を扱う。

園芸

第54・55巻

江戸の庭師の残した農書群を収録、他方で熊本の武士道とつながる養菊書も収める。

林業

第56・57巻

森林資源を利用しつつ保全した近世林業の体系を伝える文書を収録。盛岡藩、黒羽藩、萩藩の林業技術書や土砂流失防止と林業生産の直結を説いた琉球の『林政八書』を収める。

漁業

第58・59巻

近世の漁業は、今で言う日本型食生活の原型をつくり出した。農業生産に多くの資材を提供した。そして、地域それぞれの特異な漁法

開発が行われた。この三つの視点からの基本文献とともに、江戸湾での釣り、金魚飼育法などの文書も収めた。第58巻の『小川嶋鯨鯨合戦』は佐賀県呼子の捕鯨の技術と船団組織を扱った絵入りの珍書。

畜産・獣医

第60巻

獣医書として『解体新書』ならぬ『解馬新書』があつた。他に家畜への鍼灸術の手引き、飼育と畜舎を論じたものなど多彩である。ペット飼育としての犬、鶏などの飼育手引書も収録。

農法普及

第21・61・62巻

先進的な農法がどのようにして、多くの農民に伝えられ、階層差、地域差を解消し生産力の平準化が結実するか、農法移転の方法を探る。

農村振興

第63巻

二宮金次郎、大原幽学、石川理紀之助の文書とともに、下総・南生実村や信濃・芦田村に残るムラ自身の取り決め文書『議定書』の類を収録。

開発と保全

第3・64・65巻

一六六六年の幕府による『山川掟』の発布を境に開発から保全へ大転換が行われた。その間の多くの開発記録や保全技術における、甲州流、紀州流、関東流や美濃流が生まれ、日本海岸の砂防技術、対馬の焼畑(木庭作)論等の基本文献を集大成した。第3巻の『開荒須知』(群馬)は非農民の開発記録として貴重。

災害と復興

第23・66・67巻

富士山・浅間山・雲仙普賢岳の噴火、善光寺平・伊賀の地震、江戸湾・伊勢湾の津、荒川・高梁川の洪水などの現場の人間模様も含めた記録、東西の飢餓の状況を伝える文書等も収録。

本草・救荒

第18・68巻

陸中、建部清庵の『民間備荒録』(第18巻)『備荒草木図』(第68巻)をはじめ、飢餓に備える実用書を収録。薬種の国産化を勧める『薬草木作植書付』(第68巻)も収録。

農事日誌

第11・42・43・44巻

農事日誌は近世各村の暮らしを具体的に知る、またとない素材である。田畑と家畜や養蚕、耕地と用水や採草地との結びつき、販売と資材の購入、季節の移り変わりなど年中行事・信仰・遊び・ムラの共同作業など興味はつきない。肝煎の手になる羽後、畑作地帯の武蔵と下野、米単作の越中、加賀、村医者を書いた美川、寺子屋師匠を兼ねた美濃、

学者の農書

第12・14・69・70巻

宮崎安貞『農業全書』(第12・13巻)、大蔵永常『広益国産考』(第14巻)、佐藤平賀、村医者の書いた美川、平賀源内など学者農書を寺子屋師匠を兼ねた美濃、69・70巻に収録。

自信回復のきっかけに

●京都大学名誉教授 桑原武夫

日本の農業は将来どうあるべきか、そんな大それた問題に口を出す資格の皆無な私にも、この全集は関心をもちた。

私は、戦争末期に家族を疎開させていた東北の僻村を再訪して、その激変に目を見はらした。耕作の機械化はもちろんのこと、すべての農家から囲炉裏は消え去り、ポリエチ製の浴槽をあためたのはプロパンであった。私は農民の苛酷労働からの解放と近代市民化を喜んだが、同時に、今や日本農業が不可逆的に工業と結ばれたことを痛感させられた。

そうした帰結をみちびいた明治の急速な近代化、工業化、その成功は徳川期の蓄積に負っているが、その生産の中核にこれらの農書があったらどうか。これは、私に歴史なものを改めて感じさせる。このように誠実な著作を生み出した緻密な研究心と温かい心情は、日本民族の失った宝である。この古農書に現代農業の即効性を求めるよりも、むしろこれら先人の姿勢のうちに自信回復のきっかけをつかみうるのではなからうか。すべてに自信のもちにくい時代だが、自信なくして新しい道の発見のありえぬことだけは明らかだ。

一九七七年記

自然と科学の調和、近代農業のあけぼの——江戸から明治へ

明治の農法は日本の伝統農法と西欧近代科学、明治の老農と外国人教師や農学士両者の葛藤と協力から生まれた。自然を破壊しない科学技術の祖形が見えてくる。

老農の自然観＝確かな目

分析の前に総合認識、画一の前に個体認識
作物を育てるのは自然であり人間はその手助けをするという認識による伝統農法と近代科学の緊張関係は現代に多くの示唆を与える。



全 13 巻揃価格 同時 1 アクセス：219,997 円 (本体)
同時 3 アクセス：329,996 円 (本体)
発行：1983 年 冊子版 ISBN:9784540830693

明治農書全集

全 13 巻

近代農法の祖形を求めて 巻編成と収録農書

- 第一巻 稲作**
 - 林 遠里 勸農新書(明治14年)
 - 横井時敬 作物塩水撰種法(訂正増補版、明治28年)
 - 酒匂常明 米作新論(増訂三版、明治25年)
 - 酒匂常明 北海道米作論(増訂五版「米作新論」より、明治29年)
- 第二巻 稲作・一般**
 - 津田 仙 農業三事(上・下)(明治7年)
 - 中村直三 稲種選法(明治9年)
 - 奈良專二 新米作改良法(明治21年)
 - 船津伝次平 船津甲部巡回教師演述筆記(明治21年)
 - 志岐守秋 山形県稲作改良法筆記(明治24年)
 - 飯田弥次兵衛 農事講話筆記(明治26年)
 - 石川理紀之助 稲種得失弁(明治34年)
- 第三巻 稲作**
 - 鈴木良平 米作法講話録(明治26年)
 - 池川次太郎 農業実験録(明治28年)
 - 幸島直言 稲作叢談(明治28年)
 - 末吉幸次郎 興農新書(明治29年)
 - 古市与一郎 与一流稲作法(明治32年)
- 第四巻 畑作**
 - 斎藤 司 麦作改良新書(明治22年)
 - 林 顯三 福馬鈴薯誌(明治26年)
 - 杉田文三 麦菽改良栽培法(明治32年)
 - 斎藤勝広 老農斎藤勝広翁農事講話筆記(明治34年)
 - 赤沢仁兵衛 赤沢仁兵衛甘藷栽培法(明治45年)
- 第五巻 特用作物**
 - 酒井甚四郎 茶業須要(明治18年)
 - 初瀬川健増 漆樹栽培書(正編・明治20年、続編・明治28年)
 - 瀧 正吉 増補三椏栽培録(明治22年)
 - 北海道庁 甜菜栽培の心得(明治22年)
 - 田中浜吉 藜苜改良作法(明治22年)
 - 飛松忠四郎 楮園改良新書(明治23年)
 - 遠藤慶三郎 地方棉作要書(明治24年)
 - 香川県内務部 大麻栽培及び製造法略記(明治28年)
 - 第三課 煙草栽培法(明治30年)
 - 佐藤豊次 蒟蒻耕作手引草(明治32年)
 - 矢部量平 蘭草栽培法(明治34年)
 - 岡田雄太郎 除虫菊栽培製法全書(第14版、明治36年)
 - 御前喜八郎 製法全書(第14版、明治36年)
- 第六巻 野菜**
 - 福羽逸人 蔬菜栽培法(明治26年)
- 第七巻 果樹**
 - 安部熊之輔 日本の蜜柑(明治37年)
 - 松戸寛之助 実用梨樹栽培新書(明治39年)
 - 川上善兵衛 葡萄提要(明治41年)
- 第八巻 畜産**
 - 山田芳三 兔飼養書(明治21年)
 - 内藤菊造 山羊全書(明治25年)
 - 農商務省 牛馬蕃殖飼養法要略(明治25年)
 - 飯田平作 養鶏手引草(明治27年)
 - 辻 正章 日本牧羊問答(明治38年)
 - 神津邦太郎 物見山神津牧場沿革記(明治43年)
- 第九巻 養蚕・養蜂・養魚**
 - 田島弥平 養蚕新論(明治5年)
 - 藤岡甚三郎 秋蚕(明治32年)
 - 木村九藏 蚕飼の鑑(明治33年)
 - 藤沢五三郎 蚕種製造法(明治35年)
- 第十巻 土壌肥料**
 - 青柳浩次郎 蜜蜂(明治29年)
 - 黒田伝太 鯉魚繁殖法(明治22年)
 - 小柳津勝五郎 蒸焼土調和肥料製造法(明治20年)
 - 恒藤規隆 農事演述筆記(明治21年)
 - 村尾元長 鯉肥料概要(明治28年)
 - 安資農夫 実験肥料新書(明治37年)
 - 第十一巻 農具・耕地整理・排水
 - 各府県 農具図(明治13年)
 - 中井太一郎 大日本稲作要法(後編)(明治31年)
 - 鈴木浦八 畦畔改良意見書(明治33年)
 - 富田甚平 富田式暗渠排水法(明治39年)
 - 第十二巻 病害虫・農薬・雑草
 - 梅原寛重 田圃駆虫実験録(正・明治19年、続・明治21年)
 - 村上長造 農家病虫害駆除要覧(明治24年)
 - 小野孫三郎 植物害虫要説(明治24年)
 - 益田素平 稲虫実験録(明治28年)
 - 名和 靖 害虫駆除予防二問スル講話筆記(明治30年)
 - 住田史郎 浮塵子駆除予防法(明治31年)
 - 堀正太郎 作物病虫害予防法(明治37年)
 - 農事試験場 殺菌剤と殺虫剤(明治41年)
 - 高橋良直 雑草に就きて(明治29年)
 - 第十三巻 林業・林産
 - 森庄一郎 吉野林業全書(明治31年)
 - 田中長嶺 炭焼手引草(明治31年)
 - 橋崎圭三 橋崎式椎茸養成法(明治44年)

日本における近代への移行プロセスを具体的に伝える明治期の農書は当時の農民が実際に読んで実地に応用されたものである。伝統農法と西洋農学の出会い、衝突と融合がリアルに見えてくる。

●原文、読みやすい現代表記、要約見出し、詳細な注記

編集委員
古島 敏雄 (東京大学名誉教授)
川田信一郎 (東京大学名誉教授)
熊沢喜久雄 (東京大学農学部教授)
須々田黎吉 (東京農業大学農学部教授)
(所属は発刊当時の所属)

近代への転換期にこの国の未来を論じた名著を一堂に
農が国を支えるという矜持にあふれた明治・大正期の主要文献を網羅
したこの全集には近代日本の歩みを見直すヒントが秘められている。

全 24 巻揃価格 同時 1 アクセス：287,565 円 (本体) 同時 3 アクセス：431,347 円 (本体)
発行：1976 年 冊子版 ISBN:9784540760419



明治大正 農政経済名著集

全二十四巻

編集委員

近藤康男 (東京大学)
阪本楠彦 (東京大学)
村上保男 (埼玉大学)
梶井功 (東京農工大学)
(所属は発刊当時の所属)

●明治維新はほとんど無血だったとはいえ、資本制・中央集権へと国家構造を変える革命であった。国軍の創設によって国家権力は強化され、一方、文化は西欧にひたすらなびいた。そういうなかでも、明治大正期の日本農学・農政学は単に農業にとどまらず、つねに国全体の産業構造と精神構造の総体を論じていた。

●日本における近代化の過程では、一方に商工立国を唱える福澤諭吉らの論陣があり、一方で農を国の基礎として充実させることを唱えた輪客もいた。新渡戸稲造 (農業本論)・柳田国男 (時代ト農政)・河上肇 (日本尊王論)ら多彩な顔ぶれであった。

●近代ドイツの成立に農業で貢献したテアア。テアア農学を抱えて来日したフェスカが著した「日本地産論」が、日本農業の零細性を指摘しながら、同時に各地で伝統的に形成された農法がそれぞれの土地を生かす、非常に優れたものであることも発見しているのは興味深い。

●秋田の老農・石川理紀之助が村の田畑・山川・伝統文化などの地域資源を一斉調査して村人自身による村づくりを呼びかけた「適産調査要録」など、現代の地域振興の課題に連なる文献も貴重。今日の現状の課題、状況を克服するためのすぐれた方法を随所に見出すことができる。

●時代がすすむにつれ、農村経済の疲弊が進み寄生地主制が確立されていく時期に書かれた著作はわが国社会科学の原典ともいえる。ヒュウマニズムを出発点としながら、農業・農村が商工業の隆盛と対極の窮地におかれることの国民経済的弊害を説き、その克服の途を科学的に明らかにしようとした。

●若き研究者にとっては、入手困難のため、繙読の機会を失っていた著書も少なからず含まれていると思う。本名著集が、いささかでも先人の業績に対する認識の不足を補うところがあれば幸いである。

明治大正時代の原典を読みやすくした名著集

●旧漢字は特殊な固有名詞を除いて当用漢字になおしてあります。●難かしい語句にはルビを付して読みやすくしてあります。●漢文については読んで意味がわかるように意識したルビを付してあります。●原文がカタカナのものはひらがなに、濁音にすべきところは濁音に、句読点のないものは句読点を補ってあります。●読者の理解に必要な文献や注記を適宜掲示してあります。

巻編成と主な収録論文

- 1 興業意見・他
前田正名
- 2 日本地産論・他
フェスカ
- 3 日本振農策・他
エッゲルト他
- 4 信用組合論・他
平田東助他
- 5 最新産業組合通解・
時代ト農政
柳田国男
- 6 日本尊農論・他
河上肇
- 7 農業本論
新渡戸稲造
- 8 農業経営学
伊藤清蔵
- 9 実地経済農業指針・他
斎藤萬吉
- 10 土地経済論
河田嗣郎
- 11 産業組合講話
佐藤寛次
- 12 農村革命論・他
横田英夫
- 13 小農保護問題
社会政策学会編
- 14 適産調査要録・他
石川理紀之助
- 15 永小作論
小野武夫
- 16 農村法律問題
末弘巖太郎
- 17 第壹農業時論・農村行脚三十年
横井時敬
- 18 農民組合の理論と実際・他
杉山元治郎・若林三郎
- 19 明治大正農村経済の変遷
高橋亀吉
- 20 世界農業史論
佐藤昌介、稲田昌植
- 21 農村問題と社会理想・他
那須皓
- 22 農村自治の研究
山崎延吉
- 23 米と社会政策・養蚕労働経済論
ラビット他
- 24 明治農業論集
有尾敬重・幸徳秋水

日本の破局と再生への芽を正確に見定める

昭和前期農政経済名著集

全 22 巻

昭和初年の大恐慌から太平洋戦争へ、そして敗戦で終わった暗い時期は、明治以来の農村収奪の激しさを加えた時代でもあった。農業恐慌は、農民を低賃金労働者として離村させるメカニズムであり、海外へ侵出する商品の競争力の源泉であったが、国内市場を狭めてソシアル・ダンピングを強制する原因でもあった。一方で、この時期は思想弾圧が強まっていく。そうした弾圧にも屈せず、わが国社会科学が一步も二歩も前進した光輝ある時代でもあった。数々の名著を生みだし、戦後の民主化を学問的に準備した思想的・理論的格闘の中心軸は、農業問題であった。農民離村、米価統制、農家負債、産業組合、小作争議等具体的課題となった問題についても代表的著作をとりあげた。



全 22 巻揃価格 同時 1 アクセス：355,146 円 (本体)
同時 3 アクセス：532,719 円 (本体)
発行：1981 年 冊子版 ISBN:9784540780646

編集委員

近藤康男 (東京大学)
阪本楠彦 (東京大学)
村上保男 (埼玉大学)
梶井功 (東京農工大学)
(所属は発刊当時の所属)

巻編成と主な収録論文

- 1 農村問題入門・他 12 米穀流通費用の研究
猪俣津南雄 木村和二郎
- 2 農業経済論 13 日本産業組合論
近藤康男 井上晴丸
- 3 日本農業の展開過程 14 農業金融論
東畑精一 小平権一
- 4 農業問題と土地変革 15 農家負債と其整理
平野義太郎 河田嗣郎・碓正夫
- 5 日本農業論 16 農業生産費論考・他
戸田慎太郎 大槻正男
- 6 米と繭の経済構造・他 17 日本農業の機械化
山田勝次郎他 吉岡金市
- 7 日本農業の基礎構造 18 農業経済地理
栗原百寿 青鹿四郎
- 8 農業土地政策論 19 畜産経済地理
沢村康 宮坂格朗
- 9 日本農村人口論 20 農村社会の研究
渡辺信一 有賀喜左衛門
- 10 農民離村の実証的研究 21 入会権論
野尻重雄 奈良正路
- 11 農業生産の基本問題・他 22 農民闘争の戦術 その躍進他
川俣浩太郎他 大西俊夫他

各巻に 10 本前後の論文を収録、その解題さらに詳しい文献と年表付

昭和後期農業問題論集

全 24 巻

全 24 巻揃価格 同時 1 アクセス：297,323 円 (本体) 同時 3 アクセス：445,985 円 (本体)
発行：1986 年 冊子版 ISBN:9784540810794

巻編成と解題者名

- 第 1 巻 農地改革論 I 暉峻衆三 (信州大学)
- 第 2 巻 農地改革論 II 暉峻衆三 (信州大学)
- 第 3 巻 農民層分析論 I 梶井 功 (東京農工大学)
- 第 4 巻 農民層分析論 II 梶井 功 (東京農工大学)
- 第 5 巻 農村人口論・労働力論中安定子 (東京農工大学)
- 第 6 巻 農業の計量分析論土屋圭造 (九州大学)
- 第 7 巻 土地制度論 今村奈良臣 (東京大学)
- 第 8 巻 土地価格論 阪本楠彦 (宇都宮大学)
- 第 9 巻 水利制度論 新井信男 (高崎経済大学)
- 第 10 巻 食糧管理制度論 近藤康男 (武蔵大学)
- 第 11 巻 農産物価格論 犬塚昭治 (名城大学)
- 第 12 巻 農産物市場論 I 湯沢 誠 (北海道大学)
- 第 13 巻 農産物市場論 II 湯沢 誠 (北海道大学)
- 第 14 巻 国際市場論 玉井虎雄 (東京農業大学)
- 第 15 巻 農業経営理論 I 金沢夏樹 (日本大学)
- 第 16 巻 農業経営理論 II 鈴木福松 (日本大学)
- 第 17 巻 生産力構造論 五味仙衛武 (宇都宮大学)
- 第 18 巻 経営計画論・簿記論 武藤和夫 (東京農業大学)・新井 肇 (全農)
- 第 19 巻 農業金融論 鈴木 博 (農林中金)
- 第 20 巻 農業協同組合論 斎藤 仁 (千葉大学)
- 第 21 巻 村落構造論 安達生恒 (社会農学研究所)
- 第 22 巻 農民運動論 五味健吉 (法政大学)
- 第 23 巻 林業経済論 森 巖夫 (林政総研)
- 第 24 巻 漁業経済論 長谷川彰 (東京水産大学)

戦後の日本農業は地主制のくびきから解放された。自作農となった日本の農家ももてる力を遺憾なく発揮したことは、農地法制定後わずか 10 数年にして米の自給を達成したことに如実に現われている。しかし他方で農村は、戦後まもなく始まった高度経済成長のための土地、水、労働力の供給源となり、それは農産物輸入の増大によりさらに拍車をかけられた。こうした戦後の息吹と、都市・工業と外国農産物との二重のあつれきの中で生じてくる新たな問題を多角的、重層的に見られるよう編集されている。二つの「外庄」の中で、何を農村は培い次の時代につなげたか、各巻収録論文の意義について解題がついている。収録された論文以外の膨大な関連文献・年表ともども、生きた戦後農業誌を肌で感じられる全集となっている。

(いずれも発刊時の所属)

農業試験研究 1 世紀に際し、技術発達と普及の画期に焦点を当て今日の観点から 100 年をレビュー

昭和農業技術発達史 全7巻

全7巻揃 同時1アクセス=213,711円(本体) 同時3アクセス=320,568円(本体)

発行:1998年 冊子版 ISBN:9784540980275

農業試験研究1世紀記念出版。100年の社会経済的背景と農業技術の飛躍、発展のうねりをドラマスティックに描き、21世紀の農業・食料・環境を考えるベースを提供。飢えの克服から食の豊かさへ、良食味・安全・多様化・個性化へ、さらには環境調和の時代へと、生産各分野での挑戦を丹念に記録し、将来課題と展望を示す。

我が国の農業技術は、明治以来、欧米の近代科学の手法を取り入れ、この国の農業に貢献してきた。戦後の技術も新たな科学技術の進歩を踏まえ、高度経済成長からバブルに至る経済発展を背景に、一つの頂点を極めた。

水稻では単収500キロ時代が実現し、「コシヒカリ」など良食味品種も出回るようになった。小麦の「農林61号」は世界の食糧危機を救い、リンゴの「ふじ」は高い評価を受けている。問題はあがるが、農薬、化学肥料、ビニールなどの化学資材なしには、今日の高生産農業は維持できなかっただろう。田植機・コンバインなどの農機の開発によって省力化は進み、それに適する耕地の造成も実現した。果樹・野菜・畜産などの領域でも省力と品質向上をめざし、施設化が急速に進んでいる。畜産では人工授精技術があまねく普及し、優良家畜の大量飼育技術も定着してきた。最近バイオテクノロジーの進歩によって、優良種苗・家畜の大量増殖も可能になってきた。

だが近代科学を駆使し、ひたすら増産・効率化を追い求めてきた農業技術にも、落とし穴はあったようだ。その証左か、最近、技術のあり方に警鐘を鳴らす出来事が頻発している。農薬からはじまった「食品の安全性」、過剰施肥や家畜糞尿からくる「環境負荷」、水田や牛のメタンなどが引き起こす「地球生態系の破壊」の問題など。もっとも気になるのは、平場農業に偏り、中山間の技術開発が後まわしにされてきたことである…



巻編成

第1巻 農業動向編

近代日本の出発→昭和農業恐慌→農地改革と食料危機→高度成長・農業基本法→農産物過剰・自由化、各時代の社会的要請に応え危機を乗り越えてきた農業技術開発と普及の百年のドラマを、21世紀を担う人々に贈る。(発行日1995年7月)

第2巻 水田作編

明治以来百年の水田作農業の近代化の道筋、育種、育苗・栽培、施肥、病害虫・雑草防除、機械・施肥、土地利用、圃場整備等の技術の歩みを今日的視点で解析し、国際化と自由化・環境保全時代の水田農業を展望。(発行日1993年11月)

第3巻 畑作編・工芸作編

日本の土地利用(二毛作・輪作)・資源活用技術の原点と、近代化・農産物輸入の中での変貌と対応が典型的に現われる分野。麦、豆、芋、雑穀、工芸作物について、社会・経済を背景に、品種改良・技術発達を描く。(発行日1995年3月)

第4巻 畜産編・蚕糸編

最も急激な発展をみた日本畜産のドラマチックな技術展開と、食生活の充実、環境保全の要請に対応した21世紀への展望。そして明治以来最先端の遺伝学・生物学の実践場だった養蚕を絹加工技術まで含めて描く。(発行日1995年11月)

第5巻 果樹作編・野菜作編

生産の飛躍をもたらした育種、繁殖、施設、栽培、土壌管理の歴史を集大成し、21世紀を展望。(発行日1997年1月)

第6巻 花き作編・食品加工編

<花き作編>世界に誇る育種と温度・光などの調節による植物生理の高度な活用で生活の彩りを育む技術開発史。<食品加工編>味噌・醤油など伝統食品の近代化、窮乏時代の代用食から先端技術まで食品開発・食物史。(発行日1997年3月)

第7巻 共通基盤技術編 資料・年表

21世紀の農と食を考えるベースとして5つのテーマを集大成し最終巻として発行。<遺伝資源>植物・動物・微生物資源の探索・評価・保存。<農業環境>環境保全型農業の技術探究と対策。<バイオテク>生産利用と食品製造・資源高度活用への利用。<情報利用>農業の情報化と地域ネットワークシステムの構築。<基盤整備>水・土資源の高度利用と生産・生活空間としての農村整備。<海外協力技術>アジア・熱帯農業への貢献。(発行日1998年1月)

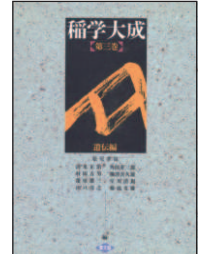
稲学大成

全 3 卷

松尾孝嶺 編集代表

全 3 卷揃価格 同時 1 アクセス=157,142 円 (本体) 同時 3 アクセス=235,714 円 (本体)
発刊：1990 年 冊子版 ISBN：9784540900174

単一植物に注がれた研究では日本の稲研究は量質共に世界一。その成果を海外の研究も含めて形態・生理・遺伝の分野毎に集大成。群落・個体レベルから細胞・分子レベルまでをバイオテク時代の稲学・生物学に向けて編成。



第 1 巻 形態編 松尾孝嶺、山崎耕宇、星川清親、前田英三、清水正治 編

世界・日本の稲の形態的特徴、種籾の発芽から生長、穂の形成と登熟、米粒の品質までの形態を克明な図解つきで解説。環境要因の形態への影響、および細胞レベルのミクロの姿も把握、稲発育の動的把握の全資料を提供。発刊：1990/11

第 2 巻 生理編 松尾孝嶺、熊沢喜久雄、石原邦、石井龍一、村田吉男 編

発育・栄養・水分、物質生産・蓄積にわたる全生理機能と環境反応、および諸障害のメカニズム、米質に関わる生理を集大成。稲の収量・品質・健全性の追究は勿論、植物機能の解明・活用のためのベースを豊富に提供。発刊：1990/12

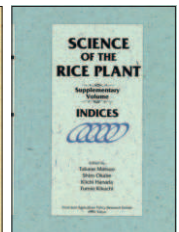
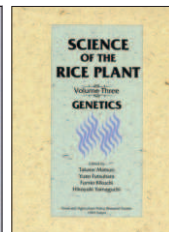
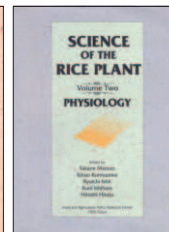
第 3 巻 遺伝編 松尾孝嶺、角田重三郎、山口彦之、蓬原雄三、菊池文雄 編

古典遺伝学と分子遺伝学を包含した新しい遺伝学の体系化に向けて、稲の遺伝育種研究の膨大な情報を整理。起源と分化から、稲の遺伝子・核型・PFLP 分析、形質の遺伝と育種、バイオテク技術と遺伝資源の活用まで。発刊：1990/8

SCIENCE OF THE RICE PLANT (英訳・稲学大成 全 4 巻) Edited by Takane Matsuo

全 4 巻揃価格 同時 1 アクセス=436,856 円 (本体) 同時 3 アクセス=655,285 円 (本体)
発刊：1993 年 冊子版 ISBN：9784540975561

The original Japanese book entitled Inagaku Taisei, a monograph on the rice plant, is really rich in terms of the comprehensiveness of its contents; it covers a wide range of biological aspects of the rice plant. It is also very unique in terms of its substance, as topics extend from basic biology to practical matters on rice. In this sense, the original Japanese monograph is a kind of a treasure house of scientific information on the rice plant. The objective of this English translation entitled Science of the Rice Plant is to open this treasure house to non-Japanese people who are interested in any scientific aspects of the rice plant.



SCIENCE OF THE RICE PLANT Vol.1 MORPHOLOGY

稲研究百年の成果を集大成した「稲学大成」第 1 巻「形態編」の英訳。イネの栄養器官・生殖器官・細胞の形態・形態の環境に対する反応など豊富な図版とともに解説。高度な科学の英訳を内外の人の手に！

SCIENCE OF THE RICE PLANT Vol.2 PHYSIOLOGY

一つの植物のもつ機能と環境や栽培への反応を、日本の稲研究ほど緻密に、かつ総合的に積み重ねた例はない。その全成果を 21 世紀のバイオテク時代、資源有効活用時代、アジア農法発展の時代に向けて英訳し世界に贈る。

SCIENCE OF THE RICE PLANT Vol.3 GENETICS

日本の稲研究の成果を 21 世紀のバイオテク時代・アジア農法飛躍の時代に世界に贈る企画。本書は最新の遺伝子記号に基づく連鎖地図、組換え DNA の解析、形質転換の研究成果を掲載した育種・遺伝学の必読の資料。

SCIENCE OF THE RICE PLANT Supplementary Vol. INDICES

マクロ・ミクロの形態、生理・機能・生態、環境、品種・育種・遺伝・生物工学・資源など稲の科学・技術に関する用語 25000 語を収録。全集 3 巻をより立体的・総合的に研究活用できる。